

「おふでさき」第一号の第四首から第六首は、  
 このところやまのしバのかみがたと  
 ゆうていれども元ハしろまい 四  
 このもとをくハしくきいた事ならバ  
 いかなものでもみなこいしなる 五  
 きゝたくバたつねくるならゆてきかそ  
 よろづいさいのものといんねん 六

まず語句の意味を確認すると、「やまと」は「大和」で現在の奈良県にあたる。「しバ」は「ジバ」と発音して、漢字では「地場」となり、一般的には「自分の住んでいる土地・地域。地元」の意味であるが、「おふでさき」の『注釈』をはじめ多くの解説書はこの「しバ」を「親神が人間を最初に宿し込んだ地点」（「ぢば」）として固有名詞的に解釈している。「かみがた」は「かみのやかた」の詰まったものと言われており、「神館」を意味する。「しろまい」は「知る」に打消推量の助動詞「まい」が接続して「知らないだろう」の意味である。したがってこの三首を端的に訳すと、「この所を大和の『ぢば』（あるいは地元）と言っているが、元は知らないだろう。この元を詳しく聞いたことなら、どんな者でも皆恋しくなる。聞きたいなら、尋ねてくるなら言って聞かせる、万事の元の因縁を」となる。

第四首の文のかたちは「○○と言っはいるが△△は知らないだろう」であり、○○にあたる「このところやまのしバのかみがた」とは、つまり「語られたもの」である。それに対して、第四首の「元」、第五首の「このもと」、第六首の「よろづいさいのものといんねん」はほぼ同義で、未だ「語られていないもの」と言える。この「語られたもの」と「語られていないもの」という枠組みから、イタリアの思想家ジョルジョ・アガンベン（1942～）の証言論を参照してこれらの三首について考えたい。

我々が何かを語る時、その何かは「語られたもの」として記憶されるが、「語られたもの」の背景には「語られていないもの」が余白として残り、多くの場合そのまま忘却される。比喩的に言えば、最初に白い紙があり、その内のある部分が黒いインクとともに文字となり「語られたもの」として現れ、残りの部分が余りとして白紙のまま現れる。フーコーは、このような白い紙から黒いインクの箇所（言葉）を限定づけ、余白を生み出す働き・規則体系をアルシブ（archive）と名づけた。「語られていないもの」から、アルシブを通過して、「語られたもの」と「余白」（これもまた「語られていないもの」）が現れる。アルシブという考え方の優れた点は、我々が語る際に忘れがちなの「余白」に注意を向けさせることだ。その際、語る我々の主体性は薄まり、あるいは消失することが前提されている。

アガンベンはこのようなフーコーの議論を受けて、最初の白紙や余白としての「語られていないもの」にはさらに「語りうるもの」（可能性）と「語りえないもの」（不可能性）があることを指摘する。我々が何かを語る時はいつも「語りうるもの」を語っている（この「語っている」という働きがアルシブ）。アガンベン「語りうるもの」と「語っている」働きとしてのアルシブとのあいだに成り立つ関係を「証言」と呼んで、法廷において第三者の証明に資する証人のように、「語りえない

もの」（不可能性）を補完する主体を想定する。アルシブとは白い紙から黒いインクが現れる仕方（現勢力）であるが、証言は黒いインクが現れる以前に控えている可能性（潜勢力）と不可能性に焦点を当てる。つまり、証言においては、言語が存在しない可能性（存在しないことができること＝偶然性）がポイントとなる。そして、アガンベン証言の構図に見られるこの偶然性こそが人間の言語活動の本質であり、「人間が言葉を話す存在であり、言語活動を有する生物であるのは、言語をもたないことができるがゆえのこと」と述べ、フーコーの議論では消失しかけていた語る主体を捉え直している。

さて、やや込み入った議論になったが、このようなアガンベンの証言論から上記の三首を見てみよう。まず「ここは大和の『ぢば』である」が「語られたもの」として現れる。と同時に、その傍らには「語られていないもの」としての余白も現れており、そこには「万事の元の因縁」が潜在的に刻印されている。そして、「語られていないもの」には「語りうるもの」と「語りえないもの」が存在しており、「万事の元の因縁」の主体が「神」（第三首に登場）であるとき、本来「語りえないもの」としての「万事の元の因縁」は中山みきを証人として語られる（証言される）と言えるだろう（アルシブとしての「おふでさき」）。

ところで、このような「万事の元の因縁」にまつわる証言の構図において、「ここは大和の『ぢば』である」と語る主体、つまり「人間」（第一首における「万世の世界いちれつ」）は独特の位置づけを得ている。第一に、「万事の元の因縁」が「語りえないもの」（不可能性）として立ち現れるなら、「神」とは別に「人間」もまたそれを語る主体のひとつの極と見ることができる。なぜなら、言語を有しないことができる偶然性こそが、言葉を話す存在としての「人間」の条件であるからだ。つまり、それは「人間」が幼児期を有する（infant = in 否定 + fant 話す = 話せない）ということであり、「万事の元の因縁」を語りえないことこそが「人間」の証であることを意味する。

しかし、この三首では、「人間」は語る主体としてではなく、むしろ「詳しく聞いたことならば」や「尋ねてくるならば」という条件づけに見られるように「万事の元の因縁」を「聴く主体」として登場している。このような「聴く主体」としての「人間」はアガンベンの証言論ではあまり考慮されていないが、それもまた偶然性（存在しないことができること）を特徴としている。なぜなら、「人間」は「聞かない」「尋ねない」ことも可能だからだ。そして、そのような人間性はこの三首では「万事の元の因縁」を「語りうるもの」（第六首の「言って聞かす」）として成立させる条件として示されており、さらに「恋しくなる」という心情的なカテゴリーに関連づけられている（この点に関しては追々考えたい）。

このように「万事の元の因縁」が「語りえないもの」として立ち現れたとき、その不可能性は中山みきを証人として位置づけると同時に、「聴く主体」としての「人間」の偶然性（潜勢力）が「語りえないもの」（不可能性）を「聴き得るもの」（可能性）へと転換させている。